

平成30年度 第2回北海道立総合博物館協議会 議事概要

会議名	平成30年度 第2回北海道立総合博物館協議会
開催日時	平成31年3月27日(水) 13時30分～15時30分
開催場所	北海道博物館 講堂
出席委員	大原昌宏会長、澤田一憲副会長、宇佐美暢子委員、児島恭子委員、佐々木史郎委員、竹垣吉彦委員
欠席委員	湯浅万紀子委員
出席者 (博物館、本庁)	石森館長、山中副館長、小川学芸副館長兼アイヌ民族文化研究センター長、川田総務部長、舟山学芸部長、右代学芸主幹、三浦学芸主幹、会田学芸主査、遠藤研究職員、高見課長(文化振興課)、栗原主幹(アイヌ政策局)
傍聴者	なし

【議 題】

(1) 報告事項1 平成30年度 北海道博物館事業実績報告
(業務実績に関する内部評価報告)

(2) 報告事項2 平成31年度 北海道博物館年度計画

・資料1ならびに資料2に基づき、北海道博物館の平成30年度事業実施報告ならびに、平成31年度計画について、舟山学芸部長、川田総務部長、小川アイヌ民族文化研究センター長から報告した。

・主な意見・質疑応答は以下のとおり。

(1) 道民参加型組織について

(委員) 参加者の意欲を継続させるために丁寧なマネジメントが不可欠であり、学芸職員だけではなく、事務職員との連携も必要。新年度の発展を願いたい。

(委員) 「道民と協働する博物館」という取組と、道外・国外という道民以外の来館者を呼び込もうとしている取組との関係性を教えてほしい。

→ (事務局) 道内からの来館者に向けては、自分たちの自然・歴史・文化を知っていただき、道外の方に対しては、本州とは異なる、北海道の自然・歴史・文化を知っていただくというコンセプトで作っている。

(委員) 道民参加型組織については、過年度から協議会で話題になっていることであり、組織の在り方の明確な提示が欲しかった。スピードアップを望む。

(委員) アイヌ民族文化研究センターの内部評価で「B」評価となっている、資料の整理・登録については、道民に参加してもらうことで促進できないのか。

→ (事務局) 博物館資料の整理・活用にあたって、様々な方の参画は有益だが、アイヌ文化に関する資料については、デリケートなプライバシー情報を含む資料も多いため、外部の方の関わり方には慎重な議論が必要だと認識している。

(2) 中核的博物館としての対応・あり方

(委員) 台風21号・北海道胆振東部地震後の対応で、北海道博物館が果たすべき役割が明確になった。

- (委員) 台風・地震後の情報収集などの迅速な対応や、国立科学博物館との協力による博物館学の研修など、北海道博物館協会との連携による取組は評価できる。
- (委員) 博物館の連携や広報に関しては、国立アイヌ民族博物館開館後も、白老だけに修学旅行客が流れないよう、情報交換や連携が必要だと考える。
- (委員) 北海道は非常に広いので、中核的博物館と地方の各博物館園をつなぐ「ハブ」的な組織がなければ、中核的な役割も果たしづらいのではないかと。
- (事務局) 北海道博物館協会では、道内を6つのブロックに分け、それぞれに事務局館があるので、そういうものがハブ的な組織に当たると考える。
- (委員) 道民参加型組織が発足したとしても、立地的に北海道博物館への来館が難しい地域の道民が多いことや、災害時のレスキューを考えると、道には「ハブ中核館」のような存在を育ててほしい。

(3) 実績報告・年度計画について

- (委員) 事業実績報告書では、過年度の評価結果を記載し、単年度だけではなく中期的な取組の推移や優先度を一覧できるようにしてほしい。
- (委員) 年度計画については、無難な目標値にするのではなく、上昇志向による内容や数値・未来志向的な表現にしてほしい。
- (委員) 今年度だけに限らず、「実績に対する客観性の欠如」、「未達に対する追及の甘さ」、「目標に対する蓋然性の無さ」が全体的に見える。
- そこで、第2期中期目標・計画の策定の際は、基本的運営方針との整合性を図ると同時に、個々人の業務目標・成長目標とリンクさせてほしい。
- また、「北海道博物館はどういったスペシャリティを持つのか」、「どういうキャラクターを持つのか」、「どんな思想を持つのか」を、しっかり定めてほしい。
- こうした当たり前の計画の立て方を貫徹するべき。

(3) 報告事項3 ほっかいどう歴史・文化・自然「体感」交流空間構想

- ・資料3に基づき、平成30年12月に策定された「ほっかいどう歴史・文化・自然「体感」交流空間構想」について、環境生活部文化振興課 高見課長から報告した。

- ・主な意見・質問は以下のとおり。

(1) 「構想」全体におけるコンセプトの不在

- (委員) 構想のラフな前段階だと見える。具体的な計画を示していく必要がある。
- (委員) 「北海道として、どのようなストーリーを伝えたいか」という、「構想」の基本的な骨格となる内容が、まったく書かれていない。それがあつて、百年記念塔などの個別の施設の在り方についても議論ができるはずである。
- (委員) 基本的なコンセプトが書かれていない。そのため、道として、北海道博物館・開拓の村など個々の施設及びそれら全体を含めたこのエリアを、将来どのような形で作りたいのか、見えないことが大きな問題である。それは、長期的に議論をしつづけていかなければいけないことだが、今回の資料には、議論の形跡が見られない。

(委員) この資料では理念がわからない。積極的なビジョンを提示してほしい。

(2) アイヌ民族の歴史について

(委員) 「北海道 100 年」のときには、アイヌ民族については考えられていなかったが、今は時代が違う。そこで、百年記念施設でも、開拓の村にもアイヌの復元家屋があったり、百年記念塔の解体後のモニュメントではアイヌと和人の「共生」を象徴するものであったりということが必要だと考える。

→ (文化振興課)「北海道博物館だけ」や「開拓の村だけ」ではなく、野幌森林公園全体を見ていただくことで、北海道の歴史がわかるような形を考えている。アイヌ民族の歴史も、開拓の歴史も、両方伝えることが必要だと考えており、バランスも配慮していかなければならないと考えている。

(委員) そもそも開拓の歴史とアイヌ民族の歴史とを分けていることに違和感を覚える。北海道の「開拓」や「開発」にあたって、アイヌ民族の「貢献」も大きかったはずだが、開拓の村などには、そうした資料の展示が少なく、過小評価されていると感じる。

(3) 博物館の在り方について

(委員) 博物館そのものについて語ってもらいたい。旧来的な「開拓記念館」からのリニューアルにあたって、議論を急いだところもあると思うので、「次の 50 年」に耐えうる新しいテーマを再構築すべき。それによって、博物館そのものの全体像についても議論してほしい。

(委員) 開拓の村も北海道博物館も含めて「博物館をどうするか」が大切だと考える。さらに、野幌森林公園をどのようなエリアにしたいのか、50 年後にどうなっているのか、現在の「構想」ではわからない。博物館を中心としたアカデミックなエリアにしたいのか。そうであれば、新しい収蔵庫を作るなど必要なことも出てくるはずである。

(4) アイヌ民族文化研究センターについて

(委員) 北海道としては、アイヌ民族文化研究センターをどうしたいと考えているのか、「構想」内に記してほしい。「国立アイヌ民族博物館と連携」は当然だが、それだけでは、北海道として、アイヌ文化研究のポータルを国立博物館だと考えているのか、アイヌ民族文化研究センターだとしたいのか、わからない。

(5) 百年記念施設及び博物館の在り方に関する具体的な提案

(委員) 「開拓の村」という名称については、変更も含め再考してほしい。

(委員) 「開拓記念館」から「北海道博物館」に名称が変わったことで歴史観が変わった。同様に、百年記念塔や開拓の村も名称を変えるという議論が必要。

(委員) 公園全体を博物館として考えると、北海道博物館でできないことを開拓の村で行ったり、野幌森林公園内の自然を博物館ではじっくり見られるなど、深い連携ができるのではないかな。

(委員) 博物館では、資料の展示だけではなく、北海道におけるライフスタイルを体験できる施設になればいい。

(6) 議論の進め方について

(委員) 博物館協議会では、このように博物館の在り方についての意見があるが、そうした意見の聴取や議論をしないで、別の会議を立てて議論をしていることは非効率に感じる。既存の協議会などから意見を吸い上げるなど、いろいろな意見を取り入れながら、骨太の議論を進めてほしい。

→ (文化振興課) 前回の博物館協議会で説明する機会があったが、それ以外に説明や意見聴取の機会がなかったことは真摯に受け止め、お詫びする。現在はあくまでも「構想」であり、この後「肉付け」をする。その際、特に博物館については、協議会委員からの意見が一番重要だと考えるので、具体的な提案を今のうちから事務局に伝えてほしい。

(4) 報告事項4 平成31年度 北海道立総合博物館協議会 スケジュール

・資料4に基づいて、平成31年度の協議会スケジュールについて事務局から説明した。